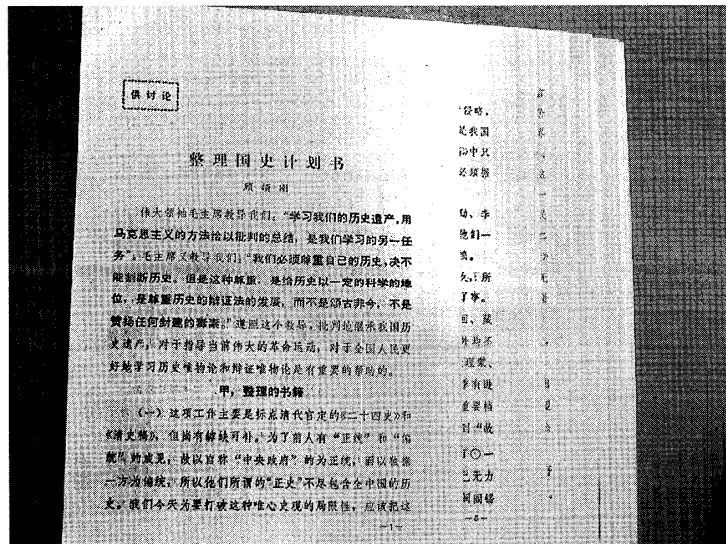


国史整理計画書

顧頡剛 遺著 邱燕凌 訳注

目次

- 甲. 整理を要する書籍
- 乙. 新局面の創出
- 丙. 植字・版本の様式
- 丁. その他



偉大な指導者毛主席は、われわれにこう教えている「歴史の遺産を学び、マルクス主義的方法によって批判的にまとめる。(これが)われわれの勉強におけるもう一つの任務である。」毛主席はこうも教えている「われわれは、自分の歴史を尊重しなければならず、決して歴史を分断することはできない。しかし、その尊重とは、歴史に一定の科学的な地位を与え、歴史の弁証法的な発展を尊重することであり、過去を称え現在をけなすことではなく、あらゆる封建的毒素を称揚することではないのである。」この教えに従い、わが国の歴史遺産を批判的に継承することは、今日の偉大な革命運動を指導し、全国人民にさらに歴史唯物論と弁証唯物論をよく勉強させるうえで、重要な役割を果たすことになるだろう。

甲. 整理を要する書籍

一. この仕事は、主に清代に定められた『二十四史』と『清史稿』に標点をつけることであるが、さらに補充すべきものもある。前人は「正統」、「偏統」という先入観に影響さ

れていたため、自ら「中央政府」と称するものを「正統」とし、一部の地域を支配したものの歴史書を「偏統」だと決め付けていた。その結果、前人が言うところの「正史」には、全国の歴史が含まれているわけではないことになってしまった。われわれは今日において、このような唯心史観的な限界を打ち破り、「偏統」政権側の史書も同等に扱い、編入させるべきである。重要と思われるものには、以下の数種類が挙げられる。

1. 『西魏書』¹⁾ 二十四卷 清の謝啓昆の作、『魏書』の後ろに置く。
2. 『十国春秋』²⁾ 百十四卷 清の呉任臣の作、『新五代史』の後ろに置く。
3. 『西夏書事』³⁾ 四十二卷 清の呉広成の作で、『遼史』の後ろに置く。
4. 『南明書』百卷余 近人銭海岳の作で、未刊行。もし原稿が見つければ、『明史』の後ろに置く。

その他の「別史」(編年体、紀伝体のほかに、歴代或いは一代の史実を記録する史書のこと)と「雑史」(一つの出来事の始末、或いは一時の見聞を物語的に記述する史書のこと)、たとえば蒙古民族が自ら作った『元秘史』⁴⁾、金毓黻が著述した『渤海国志』⁵⁾などについても、編集関係者が検討して選び、取り入れるべきである。南詔、大理などの国に関しては、その歴史がまだ系統的に記述されていない。しかし、当時の政権が長く続いたために、独自の文化が作り出されている。できれば雲南大学教授方国瑜らを現地に派遣し、調査を行わせ、結果を補編するべきである。この件については、中央指導者の意向を伺いたい。

清代の満民族統治者は、漢民族の民族意識を弱めるために、入関後十八年間にわたる南方漢人政権の歴史史実を極力に抹消しようと図った。そのため、『明史』の中には、その時期の歴史に関する記述が少なく、民族闘争の史実を見ることはできない。しかし、漢民族の手による断片的な記述が多く伝わっている。清滅亡の後、柳亜子⁶⁾らが系統的に整理しようとしたが、結局、その願いはかなわなかった。銭海岳は(無錫の人、解放後、南京文物管理委員会に所属)一人で数十年の精力を費やして、紀伝体の『南明史』百数十巻を編成した。これは一代の文献だと言える。しかし、彼は社会活動にあまり興味がなかったため、この新史を知る人は少ない。彼が数年前にもう他界したので、原稿は寧波にあるか無錫にあるかは定かではない。よって、スタッフをそちらに派遣し、調べさせなければならない。

もし幾つかの史を補うことになれば、「二十四」或いは「二十五」の数目を超えることになる。そこで、私は出来た書物の叢書名を『国史彙編』にすると考えている。適当かどうかは、検討していただきたい。

二. 『史記』から『三国志』までは、これまで『前四史』と呼ばれてきた。前代の学者たちが日常的に読んでいた書物である。そのため、補、正、考証、注釈を施す者が数多くいた。『史記』は経学、子学および古史学に関連しているために、見解の相異も多い。その旧注については、たとえば司馬貞の『索隱』、張守節の『正義』には、多くの間違いが見られる。しかも、それらの誤った注釈は次から次へと伝わり、重複するものがたびたび現れる。これは、紙面を無駄にするに等しく、実に役に立たないものである。私は前々からこのようなものを淘汰し、宋から今日までの各説の札記に載っている無用なものを切り捨て、精華だけを残し、新たな注を作ろうと思った。しかし、年を重ね、体力も弱くなり、なかなか思う通りにはいかない。これについては、編集者数人の手助けを願いたい。『漢書』

には王先謙の『補注』があり、『後漢書』には王先謙の『集解』がある。前人の考証成果のほとんどを取り入れており、旧本に代えることを提案する。『三国志』の裴松之の注は、当時各国史料を集めてまとめたものなので、貴重な価値があり、手を加える必要はない。しかし、これには、表と志がないため、補作を作った清の学者が多くおり、それらも集め取り入れるべきである。中華書局はすでに『前四史』を揃って出しているが、もし変更があれば、再び組版しなければならない。或いは、とりあえずもとの版で印刷し、そのほかの史書が出揃ってから改めてもよい。

三、元代は、領域が最も広く、民族関係も最も複雑で、抱えた問題も極めて多かった。明太祖がわずか一年の期間で『元史』を編成させたため、その中に間違った記述があることは言うまでもなからう。しかし、中には、若干オリジナルの史料が保存されているため、やはり捨てるべき価値があると言えよう。清代に入ってから、わが国の国土をロシア帝国に大量に奪われていたため、学術界において、西北の歴史を研究する風潮が高まった。張穆⁷⁾、何秋濤⁸⁾、魏源⁹⁾、沈垚¹⁰⁾、祁韻士¹¹⁾、李文田¹²⁾、洪鈞¹³⁾、屠寄¹⁴⁾などが、それなりに少なからず貢献をした。柯紹忞¹⁵⁾もこの流れを受け継ぎ、彼らの研究成果を総合し、そのうえに、系統的に整理を加え、新たに『新元史』を書き上げたのである。その中には、西アジア、東欧に保存された蒙古に関する史料も含まれている。民国総統の徐世昌がこの本を刊行させた。また、上海の開明書店が武英殿本¹⁶⁾の『二十四史』を復刻する時に、これを加え『二十五史』と称した。この書物は『元史』と並べることに対して、別に異議はないが、ただ柯氏は外国語を解さないにもかかわらず、外国語の史料を引用したため、間違いがないとも限らない。彼と同時代の屠寄が『蒙兀見史記』¹⁷⁾を著述した際、外国語の分る息子の屠孝実が史料の収集を手伝った。この事情を考慮し、二つの書物を対照しながら校正し、正確なほうを採用すればよいと思う。

四、北洋政府の時代に「清史館」¹⁸⁾が設立され、清代に活躍した学者たちが集められ、清史を編集するよう命じられた。その根拠にした資料は、清王朝の「国史館」に残されたものであった。当然のことながら、出来上がった書物には、清皇室に対しこびへつらう表現に至るところに見られる。そのうえ、これらの学者たちは、根強い忠君思想を持っているため、人民の武装蜂起に対し、骨身に刻むほどの憎しみを抱いている。ひどいところでは、太平天国と同盟会のことを「賊」や「盗」だと誹謗している。その目に余る反動さに、人民公敵の蒋介石でさえも、その本の刊行を禁止するよう命令したほどであった。『清史稿』¹⁹⁾の名称は、清史館総裁の趙爾巽が年を取り、そのうえ、病気に悩まされているため、詳細に審査する余裕もなくなり、そのまま「稿」という字を書き加え、印刷許可を出したことに由来する。果たして、本が出版されてまもなく、趙は世を去ることになった。現在、それに標点をつけることを機に、やはり修正する必要があると思われる。その理由は以下の六つが挙げられる。

- (1) アヘン戦争後、わが国は門戸を開放され、列強にほしいままに侵略され、国と人民は帝国主義の圧迫と搾取を受けた。これは、わが国の歴史上の最も大事なことであり、重点的に記述しなければならない部分にあたる。しかし、『清史稿』では、天下が泰平であるかのように粉飾するばかりか、わが国が植民地に陥落した屈辱をも隠そうとしている。そのため、史実に基づき正直に記述し、読者に中国近代史に対する正しい認識を持たせる必要がある。

- (2) 慈禧太后(西太后)が、わが国の近代史における巨悪の頭であり、奕劻²⁰⁾、李蓮英²¹⁾などが彼女を後ろ盾にして、ありとあらゆる悪事をした。清史の中で、彼ら一味の横領や残虐な行為を行った事実をそのまま記録しなければならない。さもなければ、正直に書いたとは言えず、また、民衆の怒りを抑えることもできない。
- (3) 太平天国の武装蜂起は、中国南部を十四年もの間を統治し、数多くの新しい政策を公表し施行した。これも詳細に記録しなければならず、洪秀全²²⁾一人の伝記を取り上げるだけで済ませることにはならない。
- (4) 十七世紀以来、中国は漢、満、蒙、回、蔵の五族連合の下で立国した。(中国には少数民族が五十あまりあるが、しかし、この五族のほかはすべて参政せず、故にこの五族を代表とした。)清代には「理藩院」²³⁾が設けられ、蒙、回、蔵三民族のことを専門に扱っていたが、辛亥革命後、「蒙蔵院」²⁴⁾に改名された。清の末期に、呉寄荃という進士がこの院に配属され、彼は一人で院の重要資料を写し、一年分を蒙、回、蔵各一冊にまとめた。溥儀が故宮を離れた後も、彼は「故宮博物院」に足を運び、保存された資料の抄録を続け、計二百六十七年の歴史を八百一冊の記録に作りあげ、二つの書架に収めた。『清代蒙、回、蔵典彙』と命名した。彼は自分では刊行する力がなく、書店も印刷・出版に乗る気がなかったので、とうとう出版されなかった。しかし、「蒙蔵院」が保存している資料は、すでに軍閥の閻錫山に古紙として売り出されたために、この三百年近くの辺境大事を記録した資料は呉のものしか残っていない。目下、呉がすでに故人となり、息子の呉豊培が現在中央民族学院図書館に勤務している。この原稿は『清史稿』を修正するにあたって、無くてはならない資料である。早速呉豊培を訪ね、もし原稿がまだ保存されているならば、公の施設に移し保管するよう説得し『清史稿』の修正・整理に使うべきである。
- (5) 満民族が入関する前については、清の皇帝が『満州源流考』²⁵⁾などの書物を編集させたことはあるが、しかし、隠匿が多く、信頼のできる歴史書にはならない。抗日戦争前、日本人によって『朝鮮実録』²⁶⁾が印刷・出版されたが、その中には、清が入関する以前の事実を多く記録し保存している。北京大学教授孟森が、この情報を聞き、毎日のように北平図書館に足を運び、それを抄録し『明元清系通紀』²⁷⁾(明の時代、清の史実)という書物を作りあげた。すでに数冊が出版されたが、抗日戦争中、彼が死亡したため、その遺稿は南開大学教授の鄭天挺に託され、完成するよう依頼された。現在『清史稿』の修正に際し、参考できるようにするため、鄭天挺に速やかに完成するよう伝えるべきである。
- (6) 清代前期、文字獄が極めて残虐であるため、文人学者は当世の史実を記載・議論することを恐れていた。後期になって、その状況が少し緩んできたので、逸話を記述する書物が次々と世に現れた。しかし、いまだにこれらを系統的に整理する人は現れていない。今日『清史稿』を修正する際、これらの書籍を網羅し、非を取り是を残し、修正の参考にすべきである。

以上の六つの意見は、私が急いでまとめたので、不足なところが多々あるかと思うので、専門家会議を開き討論してもらった後、修正案を決めるべきである。歴史を読むには、近代を重視すべきであり、清史の整理と編集・印刷には、本組は(顧頡剛を総括責任者とす『二十四史』などの史書を整理・出版する専門家グループのこと)最大の力を出さなけ

ればならない。それによって、読者に学習と応用をうまく結合させ、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を批判の基準にしてみらうことができるのである。

五. 各史書には、表や志があるものもあれば、ないものもある。紀、伝以外、様式も一律ではない。宋代以後、表、志を補ったものが次第に多く見られるようになり、一つの志に、数人の作者が関わり、詳しいものもあれば、簡単なものもあり、一様ではない。今回、出版するにあたり、一人の記述を採用するか、或いは、それぞれの作者の記述を整理したうえで採用するかは、協議のうえ決めるべきである。さらにまだ補作のないものがあれば、標点をつける担当者に作らせ、議論したうえで決めることが望ましい。表に、家系を列するのは『史記』、『漢書』に始まり、繁雑を除き簡約を残る効果がある。家系の表が皇帝、王侯、将軍、宰相のための家系図になるのではないかと反対意見を唱える人もいるが、しかし、これらの人々は、みんな名門豪族で、すなわち政権争奪の中心的人物である。その家系を表にすることは、すなわち彼らの人民に対して行った罪悪およびその悪を働いた年代を明らかにすることになる。

乙. 新局面の創出

- 一. 歴史の書物を一つ一つ整理するごとに、大綱を総括し、作者の功績と態度を批評し、有益なところを取り入れ、有害なところを捨てるよう読者に知らせるべきである。これは「画龍点睛」のような仕事であり、軽視することはできない。編集作業に関わるスタッフはいつもこの点に注意を払い、仕事が一区切りになるところで、「出版説明」を作成し、姚文元に提出し査読してもらおう。採用されないものは、担当者に返して作り直し、再度姚文元に修正をお願いする。毛主席の本国の歴史を尊重し、歴史を分断することなく、そのうえ、歴史に一定の地位を与え、あらゆる封建的な毒素を追い払うという考えに、この仕事を合致させるようにしなければならない。
- 二. 史書を読むには、必ず地図を参照しなければならない。それ故に、先人は「左図右史」と言っていた。今日、製図技術においては、精密度がますます高まり、史書に地図を入れれば、読者がさらに読みやすくなる。領域の広さが時とともに変遷しているため、「編年地図」を製作すべきであるだけでなく、戦局、交通、人口増減、納税数、史書に根拠となる記録さえあれば、順に挿入すべきである。復旦大学教授譚其驥²⁸⁾が生涯歴史地理を研究し、上からの指示を受け、すでに大学に「製図室」を設けて、楊守敬²⁹⁾が幾つかに分割されていた『歴代輿地図』³⁰⁾を新式の一枚の地図に改製する作業を進めている。彼は解放後に改定された省県図を底本にし、本組の地理方面における作業の基礎となっている。これが出版されれば、すぐに各史書に取り入れることができる。残念なのは、地図の版面が大きすぎて、そのまま組み入れるには不便だが、版面を縮小し、或いは、数枚の地図に分割し、各時代の史書に含めることができる。その一つ一つの時代には、境域が拡大される時期もあれば、縮小する時期もある。幾つかの地図に分け、別々に作製し、西暦編年を用い、読者に地理と年代の関係を一目で分るようすべしである。北京と上海間の距離が遠いため、頻繁な打ち合わせ会を開くことは望ましくない。よって「科学院歴史研究所、歴史地理組」に研究を頼み、意見を提出させ、共同討論した結果を譚其驥に報告させ、彼に決めてもらうことにする。そして、その結果を北京の地図出版社に送付し、精緻に印刷させる。行き違いの

ないよう細心の注意を払うべきである。

- 三. 各時代の車や服飾（輿服）、道具（器用）、機械、器具（儀器）なども、挿絵がないと分らないので、中国歴史博物館および故宮博物院の両機関にスタッフを集めてもらい、重要なものを選んで撮影し、出来たものを本組の検査を経たうえで製版し、各史書に挿入する。各省の博物館に対しては、特殊な器物、たとえば「楚墓」から出土した器物なども同様に扱うべきである。張政烺と周宜英は、長年各地の古跡を駆け回り、古物を収集しているので、彼らも取材と撮影に加える。最後に張政烺に各地からの写真をまとめたうえで、一つの目録を作成することを任せ、それを基準に配置や選定作業を行う。
- 四. 各史書に標点をつける際、年月がはっきりしている重要な史実の摘要カードを作り、『資治通鑑』に『通鑑目録』があるように、西暦を加え、甲子（十二支十干による日の表わし方）記日を初一、初二のように期日を改める。（これには、陳垣³¹）の『中西回史日曆』が参考になる）。一つの史書の整理が完了したら、それらの資料をもとに『年表』を編成し、検索しやすいよう、書物の後ろにつける。その年月日がまちまちのものには、さらに調査・考証を行い、間違い部分を削除し、正しいものを残す。その間違いとされたものを各篇の下に記しておく。
- 五. 史実が錯綜複雑であるため、読者に分りにくいものについては、各段落の上のほうに、小見出しをつける。これにより、要点を強調することが出来る一方、読者にも中心内容が一目で分るようになる。
- 六. 索引は、読書における不可欠な武器である。現在、中華書局で印刷・出版された古籍には、索引をつけているものが多い。このことから、この出版社では、すでにこの方面の人材を養成していることが分る。各史書が最終校正を終え、植字に送付する際、最終原稿を何部かを余分に印刷し、他のグループに渡す。こうしてもらうには、二つの利点がある。その一、それぞれの組の編集スタッフに再度読んでもらい、間違いを減らすこと。その二、文章中のすべての人名、地名、官名、書名、器物名、方言、術語を赤い印をつけて、中華書局に渡し、いずれの史書の何ページ、第何行であるというように、索引を作成してもらう。画数順に並べ、読者に検索しやすいよう各史書の後ろにつける。また、この作業を通して、互いの連絡を密にし、将来『中国歴史辞典』を作る下準備にすることもできる。人名、地名について、同じ名称である場合、読者を混乱させないように、索引の中に、人名については、その人物の原籍地や時代を明記し、地名については、現在の地名を明記すること。それによって、誤解を避けることができる。

以上六つの項目である。

そのうえに、出版説明を各書の初めに置き、地図および器物図を各書の中に入れ（本紀、地理、書誌、列伝など、その関係する適切な個所に挿入する）、年表および索引は、書物の後ろに置き、各篇、各段の前にそれぞれ小見出しを置く。こうすれば、一目瞭然になる。索引を引けば、すぐに見たいところを探し出すことが出来るので、巨大な書物ではあるが、誰にでも使えるようなものになれる。

丙、植字・版本の様式

- 一、わが国では、本や新聞がもともと縦書きであったが、解放後、横書きに改められた。人々はすでにこれに慣れていることを考え、かつ外国との関連性にも配慮し、また、外国語の原文をつける場合は、横書きにしたほうが便利であるため、本書物の植字も横書きに改める。これにより、後世の人々にも読みやすくする。
- 二、もともとの校訂・注釈文を本文の中に挿入すれば、本文を読みやすくする役割は果たせるが、そのため、全篇の意義が区切られてしまうことがある。注釈が長く、本文が短い場合は、かえって主従関係があべこべになってしまうようなマイナスの結果を招いてしまう。現在、この書物を新たに植字・印刷するにあたり、本文は4号活字、校訂・注釈は5号活字を用いることにする。校訂・注釈に番号をつけて、本文の下一格に置き、横線で区分する。注釈が多ければ、すなわち上格は少なくなるが、注釈がなければ、すなわち上格は全ページを占めることになる。わが小組が作った校訂・注釈は、新5号活字を採用し、旧注釈の下格に置く。こうすれば、整然として混乱することはない。
- 三、新聞用の紙で印刷すると、コストは安く販売もしやすいが、長持ちせず、三、四十年後には黄色く変色し、また、もろくなって破れやすい。本書はドーリング紙とインデアンペーパーにそれぞれに印刷し、価格も異なるように設定する。図書館で用いるものは、毎日多くの読者がページをめくるであろう、木造紙を使用すべきである。
- 四、各史書の出版は、時代の順番に従う必要はない。原稿が完成した順で印刷に送付すればよい。そうすれば、書物の完成が早くなるだけでなく、関わるスタッフも互いの経験を参考することができる。

丁、その他

- 一、編集に関わるスタッフが、分担しやすく、また、討論しやすいように、以下のようなグループに分けてみた。
 - 第一グループ：『晋史』から『北史』まで、計十二部。
 - 第二グループ：『旧唐書』から『十国春秋』まで、計五部。
 - 第三グループ：『宋史』は、全篇が長いため、一部だけにする。
 - 第四グループ：『遼史』、『金史』の二部。
 - 第五グループ：『元史』、『新元史』の二部。
 - 第六グループグループ小組：『明史』、『南明史』、『清史稿』の三部。
 - 第七グループ：図表や索引の作成、各図書館や蔵書家の調査および版本の保存などの仕事を担当する。
- 二、各史書は、それぞれ三部ずつ（すなわち、1、汲古閣本十七史。2、武英殿本『二十四史』。3、商務印書館二十四史）を用意し、三名のスタッフがそれぞれ校点（校訂し標点をつけること）する。それから、別のスタッフに総合校点させ、異同を明記する。一人で決めかねるものに関しては、討論したうえで決める。
- 三、前人が史書を読む時、よく圈点をつける。それは、今日のわれわれの標点作業にとっても参考になるので、各図書館および蔵書家のところにスタッフを派遣し、借用して

参考にし使用後必ず返還する。

- 四. 師範大学学長陳垣先生は、長年、史書に関する研究を重ねてきた。彼には『二十四史朔閏表』、『史諱举例』などの著作がある。また、『冊府元龜』の中から、『魏書』の欠けている部分を見つけ出した。陳先生は、今日の史学界の重鎮的な存在であり、われわれが作業中における疑問難問が出てきた場合、彼の助手の劉迺和を通して先生に教えを乞うことができるだろう。
- 五. 陳寅恪³²⁾先生は、アジア各国の古代文字に最も詳しい。彼は生涯唐史を研究してきたので、その助けも願いたい。彼は高齢であるため、その勤務先である清華、中山両大学から適切な人を推薦してもらい、一緒にこの仕事を進めるとよいだろう。
- 六. 上海中華書局が、すでに二、三十人を集め仕事を始めているが、彼らと協力して、できるだけ早く且つうまくこの仕事を完成すべきである。
- 七. スタッフは定期的に会議を開き、さまざまな問題を討論し、また、定期的に報告を行う。党の指導の下で、計画どおりにこの任務を完成することを期待する。

〔訳者 附記〕顧頡剛の「国史整理計画書」は1971年4月29日、中国共産党中央弁公庁が主催した出版座談会に提出した『二十四史』と『清史稿』に関する整理出版の計画原案である。原文は活字で印刷された内部文件であるため、未だに公表されていない。島根県立大学助教授陳仲奇は、平成14年度文部科学省科学研究費特定領域研究(A)東アジア出版文化研究の助成金を受けて、平成14年8月26日～9月13日の間、北京での現地調査した際、顧頡剛の娘である顧潮からこの文章を入手した。この「国史整理計画書」が書かれた当時、文化大革命の真っ最中にあつたため、顧頡剛の国史整理に関する大掛かりな「計画」構想は、中央指導者の思惑に合致していなかったため、意見の大半は、その後の中共中央弁公庁1971年5月14日の正式文件に採用されなかった。しかし、1978年以降、陳雲の指示により、古籍整理事業が再開されてから今日までの中国出版事業の筋道を顧みると、顧頡剛の提唱した基本精神は生きており、その意義は実に大きいものと分る。さらに、この文章は顧頡剛の歴史学の重要観点を反映しているため、顧頡剛の歴史観や史学思想を知るうえでも、貴重な資料となる。よって、研究代表者陳仲奇は訳者にこの文章を訳したうえで、注をつけることを委託した。公刊に際して、その経緯をここで記しておく。

注

- 1) 『西魏書』、謝啓昆の作。本紀一、表三、考二、列伝十三、載記一で合計二十四巻からなる。將軍、宰相の征伐を詳しく記載している。謝啓昆は、江西南康の人で、字は蘊山、号は蘇潭。清の役人で、歴史学家である。乾隆25年(1760)の進士。散館の編修に授かり、その後まもなく、国史館の纂修になる。後、鎮江府知府、揚州府知府、浙江按察使、広西巡撫などを歴任した。広西巡撫在任中、湘、灑両江のダムを造り、それはいまだに地域の住民から「謝公堤」と呼ばれている。
- 2) 『十国春秋』、呉任臣の作。五代の十国史。本紀二十四、列伝千二百八十二、人物を国ごとに分類し、出来事も細分している。総じて百四十巻で、後ろの六巻は、十国の暦、家系、地理、藩鎮、百官を五表にしたものである。新旧『五代史』、『九国志』および雑史、地方誌、文集、雑

- 記、小説などを根拠にして作成された。呉任臣は、浙江仁和の人で、字は志伊、爾器、号は托園である。康熙18年(1679)に、翰林院檢討になる。歴史学を精通するだけでなく、天文学や「奇門遁甲」の術にも長けている。当時の人々から「管、郭」(管輅、西暦209~256年、三国時代魏国の術士。郭嘉、西暦170~207年、三国時代曹操の謀士)とたとえられていた。
- 3) 『西夏書事』、呉広成の作。清道光5年(1825)に完成された編年体の西夏史で、全四十二卷。呉広成は唐、宋、遼、金の各史および文集、野史から関連資料を収集し、互いを参照しながら『西夏書事』を作った。これは、西夏の歴史を研究するための重要な著述である。
 - 4) 『元秘史』、本来の名称は『蒙古秘史』である。日本では『元朝秘史』、『元秘史』と訳され、作者は不明である。十三世紀中期に完成され、わが国における蒙古族の最も早い蒙古文で書いた歴史文献であり、文学作品である。『蒙古黄金史』、『蒙古漂流』とともに、蒙古民族に関する三大歴史著作と言われる。現在は、明の漢字標音本(漢文訳つき)のみが残されている。
 - 5) 『渤海国志』、金毓黻の作。『渤海国志』は、すなわち『渤海国志長編』のことで、全二十卷、1932年末に完成。金毓黻(1887~1962年)原名毓璽、また、玉甫ともいう。号は謹庵、静庵。別号は千華山民、室号は静悟。遼寧遼陽の人。1916年北京大学国文学部を卒業。後、政界入りにし、東北政務委員会秘書、遼寧省教育庁長などを歴任した。「九・一八事変」の時、日本側に逮捕されたが、三ヶ月後、知り合いの口利きで釈放された。1936年、日本経由で上海に行き、蔡元培、傅斯年の紹介・推薦を受けて、中央大学歴史学部の教授になる。また、国民党政府行政院参議を兼任し、1947年、国史館纂修となる。1949年2月、旧国史館が北京大学に編入された時、北京大学文科研究所に転属、同時期に、教授として北京大学と輔仁大学で教鞭を執る。後、中国科学院歴史研究所第三所研究員になる。彼は二十世紀前半の中国における著名な史学家で、特に東北史、宋、遼、金史を精通している。代表的な著作には、『東北通史』上編、『宋遼金史』、『中国史学史』などが挙げられる。
 - 6) 柳亜子(1886~1958年)、江蘇呉江の出身である。詩人。もとの名前は慰高。後に棄疾と改名した。字は安如、亜廬、亜子。同盟会会員、南社社長である。孫中山総統府秘書、上海通志館館長などを歴任した。「四・一二事変」後、日本に逃亡し、1928年帰国したが、反蒋介石の活動を続けるため、国民党に除名された。解放後、中国人民政府委員、全国人民代表大会常務委員になる。著作には『柳亜子詩詞選』がある。
 - 7) 張穆(1805~1849年)、清の地理学家で、山西平定州の出身である。もとの名は瀛暹で、字は石洲、誦風、号は烏齋である。道光11年(1831)貢生になる。経史、天文、算数などを得意とし、特に西北地理を精通する。著書には『蒙古遊牧記』、『烏齋文集・詩集』などがある。『元朝秘史』を校正した。
 - 8) 何秋涛、福建光沢の人である。幼少の頃、天下の府庁州県の名を挙げ、それぞれの辺境までに暗誦できた。1843年に、進士となり、刑部主事の官職に就く。好んで友と交わり、読書の幅も広い。『呂刑』から清朝までの律文を『律心』という書物にまとめたが、相国の祁韻士もそれを見て驚いたという。しかし、その稿本が盗まれたため、伝わっていない。彼の『朔方備乘』(書名は文宗皇帝から賜った)は、北の境域の出来事を記述し、蒙古、新疆から中央アジア、東欧まで、特に元代の北の諸王と北の境域について考証し、元史研究の重要参考書となっている。全八十卷。凡例目録一卷。ほかに、『蒙古遊牧記補注』四巻などがある。
 - 9) 魏源(1794~1857年)、清の思想家、史学家、文学家である。湖南招陽の人で、もとの名は遠達、字は默深である。道光年間(1821~1850年)の進士で、高郵知州の役職までのぼった。アヘン戦争の際、两江総督裕謙の下で、英国に抵抗する戦役に加わり、道光22年(1842)『聖武記』を完成した。また、林則徐からの依頼で、『四洲志』や中外文献資料を根拠にして、『海国図志』を編纂した。その中で、彼は西洋の先進技術を学び、武器製造に応用し、国防を強め、外来の侵略を抵抗せよと主張した。さらに、「及之爾後知」(接して初めて知るとなり)の考えを打ち出し、後のブルジョア階級改良主義の興起に一定の影響を与えた。著作には『元史新編』、『老子本義』などがある。今人より『魏源集』が編集されている。

- 10) 沈垚、浙江烏程の人である。字は子効。道光14年(1834)貢生になる。地理学を精通し、『水経注』や『元和郡県志』を暗誦できるほどであった。徐松(清学者、榆林知府などの官職に就いたことがある。地理学に詳しい。新疆伊犁や天山南北を視察し、『西域水道記』、『新疆志略』などを著述し、清代の西北地理研究の先駆者)が彼の作った『新疆私議』を見て、大変感心したという。後、徐松は『元史』の西北地理を考証する際、沈垚に手伝いをさせた。
- 11) 祁韻士、字は鶴臯。寿陽の人。乾隆43年(1778)進士になる。編修、戸部主事などの官職に就く。幼年時代から歴史が好きで、万卷の書物を読破した。後、翰林に入り、国史館の纂修になる。参考文献が欠乏する中で、蒙、藏、回の複雑な構造状況を調べ、『蒙古王公表伝』の作成に取り組み、8年後に完成した。彼が新疆伊犁に左遷された時、当地の事をまとめた文章を徐松は続けて書き、後の『新疆事略』となった。
- 12) 李文田、広東順徳の人である。清咸豊9年(1859)の進士となり、後、編修を務める。見識が広く、学問が深い。「南書房行走」(南書房、北京故宮乾清宮の西南にあり、もともと康熙帝が読書の場所だが、康熙16年(1677)年に初めて翰林などを選んでそこで当直させ、南書房行走という)に命じられた後、禮部右侍郎の官職に就いたこともある。『元秘史』を考証・訂正し、十六巻の注を作った。また、『元史地理志』と『經世大典』の疏誤を糾して『元史地名考』十巻、『西遊録注』二巻を著した。書道にも造詣が深く、特に北魏諸体が得意であった。
- 13) 洪鈞(1839~1893年)、清末史学家。江蘇吳県の人である。字は陶士、号は文卿。同治年間(1862~1874年)進士となり、兵部左侍郎となった。ロシア、ドイツ、オーストリア、オランダの四国大臣になり、ロシア人のベラキンの訳した『部族志』、『ジンキスカン本紀』、そして、アミア人ドサンなどが著作した『蒙古史』を接することができ、これらの西洋の史料を参考に『元史』を補正し、『元史訳文証補』を作った。全三十巻あることになっているが、目録だけで、実物がないものが十巻。
- 14) 屠寄(1856~1921年)、史学家。江蘇武進の人である。字は敬山、景山、結一宦主人ともいう。清光緒18年(1892)進士になる。翰林院庶吉士、京師大学堂正教習などを歴任した。辛亥革命後、北京大学国史館総纂に就任した。歴史や地理学に造詣が深く、蒙古史に特別詳しい。著書には『蒙兀児史記』五十巻(辞海では、百六十巻となっているが、未完成)があり、『元史』を大幅に補正した。
- 15) 柯紹忞(1850~1933年)、史学家。山東膠州の人である。字は鳳蓀、号は蓼園。清光緒年間(1875~1908年)の進士である。翰林院編修、侍読、侍講、京師大学堂総監督などを歴任した。1914年、清史館代館長、総纂を務めた。『清史稿』の中の天文志を執筆した。また、『元史』に力を注ぎ、前人の研究成果をまとめ『新元史』を作成した。
- 16) 武英殿、紫禁城内の建物の名前である。今日の北京故宮博物院内にある。乾隆(1736~1795年)時代に、ここで校正・刻印された『十三経』、『二十四史』などを「武英殿本」と呼ばれる。略して「殿本」ともいう。
- 17) 『蒙兀児史記』、屠寄(本稿注14を参照)の作で、紀伝体蒙古元朝史である。「元史」という名称には、各汗国を含まないことから、蒙兀児史と改称した。フビライ以前の史実を重視し、各大汗国の事も詳しく記載している。従来の史料のほかに、西洋の史料も参考し相異を見出し、注釈をつけた。結局未完成のままであった。
- 18) 清史館、清代に設置された国史館のことで、清史を監修する機構である。翰林院の管轄下であり、総裁、副総裁を設ける。辛亥革命後、清史館と改名された。『清史稿』が完成された後、廃止された。なお、北洋軍閥統治の時、民国史を編纂するため、国史館が設置され、1916年に国史編纂処と改名した。国民党統治時期にも、国史館を設けたこともある。
- 19) 清史稿、書名。清史館の総裁趙爾巽が主編である。全五百三十六巻。1914~1927年の間に作られた。清代国史館の底本と『実録』、『聖訓』、『東華録』、『宣統政紀』などを根拠にした。編纂に携った学者たちは、清朝の遺老であったため、清の各皇帝の功績をたたえ、欧米列強によるわが国の銀行、道路、鉱山など方面での侵略行為について、記述することを避けた。この書物

- には、「関内本」と「関外本」の二種類がある。両者には文字から記述内容まで相異が見られる。
- 20) 奕劻 (1836～1918年)、清の宗室である。満族、愛新覺羅氏。光緒10年(1884)に各国事務大臣に命ぜられ、以来、外務部総理大臣、軍機大臣(陸軍を兼管)、内閣総理大臣を歴任した。1900年、李鴻章とともに全権大臣に任命され、義和団事件の処理について、八ヶ国連合軍と講和協議を行い、1901年『北京議定書』を結ぶ。在任中、権力を利用し、私利私欲のために、賄賂、横領などを繰り返した。
- 21) 李蓮英(?～1911年)、清末の宦官。直隸河間の人である。渾名は皮硝李。初めは行商をしていたが、逮捕され、釈放された後、靴修理で生計を立てた。咸豊年間(1851～1861年)自ら去勢し、宦官になった。新型の髪結いが得意であるため、慈禧太后(西太后)の寵愛を受けて、梳頭房太監から総管太監に抜擢された。宮内で五十余年仕え、朝政を干渉し官職や爵位を売り、維新派を陥れ数え切れないほどの悪事を働いた。
- 22) 洪秀全(1814～1864年)、太平天国の指導者。広東花県の人である。彼は『勸世良言』から西洋のキリスト教の教えを学び、1843年6月に「拜上帝会」を創立。1845年から46年にかけて『原道救世歌』、『原道醒世訓』、『原道覺世訓』など一連の文献を書きあげた。1851年1月11日、広西桂平金田村で一揆を起こし、太平天国を打ち立て、天王となる。1853年、太平軍が南京を陥れ「天京」と改め、太平天国の都と定めた。しかし、南京定都後、内紛が起り分裂した。清朝は、これを機に征伐の軍を進め、外国義勇兵の協力を得て、太平軍を鎮圧した。1864年3月、南京が陥落し、洪秀全は服毒自殺した。
- 23) 理藩院、清の官署名である。蒙古、チベット、新疆、四川各地の少数民族事務を掌握・管理する機関である。主に部界、封爵、給俸、戸籍、耕作、賦税、辰濟、兵刑、交通、会盟、朝貢、宗教などの事務を扱う。光緒32年(1906)に理藩部に改称された。
- 24) 蒙藏院、旧官署名。蒙古、チベットなど地域の少数民族を管理する機関である。辛亥革命後、清の理藩部が廃止され、蒙藏事務局が設けられ、内務部に属する。1914年に蒙藏院と名を改め、各部と同格扱いになる。総裁を置き、下には民治、宗教、翻訳、辺衛などの科を設置し、1928年に蒙藏委員会に改称された。
- 25) 『満州源流考』、書名、全二十巻である。乾隆43年(1778)に完成した。内容は部族、境域、山川、国俗の四部門に分かれ、満州族について、肅慎以来の諸部の興衰および金源以来の官制などを記述している。東北地方の歴史地理や満族の先祖および東北の諸民族を研究するうえで、参考になる史料である。
- 26) 『朝鮮実録』、『朝鮮王朝実録』のこと、1932年に刊行した。李氏朝鮮の編年史である。太祖(1392～1398年)から哲宗(1849～1863年)まで歴代諸王のことおよび政治、経済、文化、対外関係などの史実が記述されている。千七百八巻。五百年の歳月を経て完成した著作である。
- 27) 『明元清系通紀』、近人孟森の作である。前編一卷、正編十五巻。編年体で、明の暦で清の家系を記述することから名をとった。
- 28) 譚其驤(1911～1992年)、歴史地理学家。浙江嘉興の人である。字は季龍。1930年上海暨南大学を卒業した。1932年燕京大学大学院を卒業した後、北平図書館に就職し、輔仁大学、北京大学、燕京大学、清華大学などの教師を兼任した。1950年より復旦大学教授となる。歴史学部学部長、中国歴史地理研究所所長を歴任した。1980年中国科学院学部委員(院士)となる。編修した主な書物には『中国歴史地図集』、『辞海』歴史地理部分があるほか、著書に『長水集』がある。
- 29) 楊守敬(1839～1915年)、湖北宜都の人である。字は惺吾、晩年、号は隣蘇老人。商家の生まれであるが、幼年時代、昼は商売を学び、夜は読書にふけた。清同治1年(1862)に科挙に合格し、挙人となる。暇な時、各地をまわり、古書や碑版文字を収集した。光緒6年から10年(1880～1884年)まで、駐日欽使黎庶昌の随員となる。日本滞在期間中、日本が明治維新を始めた時期にあたり、古来の書物が軽視され、安く売られているので、彼はこれを機に、国内で散佚した書籍を集めることに力を入れた。宋元時代の旧刻本の『古逸叢書』数種類を影印した。帰国後、湖北で教職に就く。両湖書院地理教習と勤成学堂総教長を歴任した。辛亥革命後、上海に隠居

し、1914年袁世凱に顧問として招聘されたが、翌年、病気で亡くなった。生涯にわたり、歴史地理を研究し、地理方面の著書には、『禹賢本義』一卷、『漢書地理志補校』二卷、『三国郡県表補正』八卷、『隋書地理志考証』八卷、『古地理志輯本』三十二卷、『歴代輿地沿革險要図』(歴代輿地図)若干卷、『水経注疏』八十卷。そのほかに、目録に関しては、『日本訪書志』十六卷、『留真譜』初編十二卷、続編十二卷、『叢書挙要』二十卷、『隋書経籍志補証』四卷、『唐宋類書引用書目』八卷。金石書道方面の著書には、『宇貞石図』若干卷、『楷法溯源』十八卷、続十八卷。ほか多数ある。

- 30) 『歴代輿地図』、中国歴史地図集。楊守敬らが編纂。清末に完成。春秋戦国秦漢から、三国両晋十六国南北朝隋唐五代十国宋遼金元明に至るまで、一王朝或いは一国を一つの組に分け、計四十四組に、『歴代輿地沿革險要図』と名づけ、三十四冊に装丁した。
- 31) 陳垣(1880~1971年)、中国史学家。字は援庵。広東新会の人。幼年時代に独学で、医学を習ったことがある。後、「光華医学校」を創設。辛亥革命後、医学をやめて、政治の道を歩むことにし、『震旦日報』を創立した。1912年、中華民国が成立すると、衆議院議員となる。1914年袁世凱が国会を解散した後、北京に住まいを移し、歴史研究に専念する。1926年から1952年まで輔仁大学学長、1952年から1971年まで北京師範大学学長、京師図書館館長、中国科学院歴史研究所第二所所長などを歴任し、1959年、中国共産党黨員になる。火襖、摩尼、佛、道、天主などの宗教史および元史、年代学、校勘、輯佚、史諱などの方面において、貢献が大きい。著書には『元西域人華化考』、『校勘学积例』、『史諱举例』、『南宋初河北新道教考』、『明季滇黔仏教考』、『清初僧諱記』、『中国仏教史籍概論』、『二十史朔閏表』、『中西回史日曆』などがある。
- 32) 陳寅恪(1890~1969年)、中国歴史学家。江西義寧(今修水)の人である。詩人で、晩清の「同光体」詩派の領袖陳三立の息子である。清華大学、西南連合大学教授、中央文史館副館長などを歴任した。魏晋南北朝史、隋唐史、蒙古史および梵文、突厥文、西夏文などの古代文字、仏教經典に関して、深い造詣を持っていた。著作には『隋唐制度淵源略論稿』、『唐代政治史述論稿』などがある。

(QIU Yanling)